

第十六帖

関屋せきや

「逢坂の関やいかなる関なれば しげき嘆きの中を分くらん」

へ逢う坂の関〜といいながら、どうして二人の仲を引き離していくの？ 繁木しげきの中の道なき道に分け入るように、悲しみにしか出逢えないなんて……。 (空蝉)

空蝉うつせみ はあの一夜の後、伊予介いよけ から常陸介ひたちなのすけ となつた夫にしたがい、東国に下っていました。

任期が満ちて上洛する常陸介一行が、逢坂の関を越えて京に入ろうとする折しも、

石山 詣 での源氏の行列と
行き合わせます。

源氏にとって、空蟬は今も
忘れられない女。思いもか
けぬ邂逅に、空蟬の心もあや
しく乱れます。しかし、輝く
ばかりのあの方は、今ではす
っかり遠いお方。

「行くと来とせきとめ
がたき涙をや たえぬ清水と
人は見るらん」来し方も行く
末も、この涙が止まることは
ないのでしよう。

逢坂の関は、恋の涙川の流
れるところ。空蟬は夫との
死別後、継子の河内守
の懸想に、女の宿世をはか
なみ、出家して尼になりました。
た。

（文・小金陽介）